

人生100年時代 語り継ぐ戦後75年

正月に戦争体験を4世代で共有する

前田 ときさん(94)

伊達市

大正15年生まれ

94歳の今も庭仕事をこなし、丹精した花をたくさん咲かせてくれて、福多も美らせる前田ときさん。今度の正月も4世代で集まるのを楽しみにしていて



まあだ。とき 北電に勤めていた夫の操さんと8回の引っ越しを経験。温暖な伊達を永住の地と定め、定年退職前から住み始めて47年になる。夫が2010年、90歳で亡くなつてからは1人暮らし。

体の横 土に弾丸

アツツ島に向かう兵士が出港前に民家に分散して宿泊したため、我が家にも二人、泊まつっていました。米2合、酒2合、ホック2匹を持参、母が調理して出すと「みんなで食べたい」と言ってくれました。

2

お正月は友人の娘夫婦
孫、2人のひ孫と私
が勢ぞろい。隣町のザ・ワインザバーへ
一ホルダ洞爺で過すのを恒例に
しています。

一部屋に集まつてカードゲーム
などのお遊び会に興じるのですが、いつも最初は私の話から始まります。
「おばあちゃんの話を、ます聞いて！」
こんな具合に戦争体験を話し始めます。

週末」と農村へ

私は小樽の手宮公園近くで生まれ育ちました。終戦の前年、昭和19年（1944年）にもなると食糧事情は悪化するばかりでした。配給は欠配ぎ。
両親ときようだいりの8人家族だった我が家では、その日食べるものを求めて必死でした。公務員だった私は日曜になると、母と一緒に農村地帯に衣料と食料を交換してもらいに行くのです。

初めのころは良い物もありましたが、手持ちが尽きると重足や長靴、木綿着などを持って行くようになりました。そんなものを持って行つても、なかなか交換してはもらえません。

ある日、朝から銀山（後志管内仁木町）を歩き回つても、何も分

朝から歩き回りやっともらえたおにぎり

「白米だ」涙したあぜ道

「そんなとき、大きな農家の開け放された裏口から、ごはんの香りが漂ってきました。若い女性がかまどの前で焼き立てのごはんを、おひつに移しているところでしょ」とお母さんが喜んでいました。

母が「何か食べるものを分けてもらわせませんか?」とお願いすると、「ほんの少しあればいい」とお母さんは喜んでいました。おひつに入れたごはんを、お母さんは木綿袋に入れて、おひつから離れて置くと、おひつの中の熱で、お母さんの手が暖かくなるのです。

おひつの中の熱で、お母さんの手が暖かくなるのです。

長い年月が過ぎましたから忘れないでください。どうして人間同士が戦うのか。悲惨しかありません。こんな話をする時、娘は涙を流し、孫はホントにあったことになんだね」「ばあちゃん、よく生きていたね」と言います。私は気持ちは伝わったことに満足し、元気出して喜びます。
「100歳になるまで、まだまた生きるからね」

〒060-8711（住所不要） 北海道新聞くらし報道部 フォクナ 011-210-5607 メール： kurashi@hokkaido-np.co.jp

©北海道新聞社

人生100年時代 話り継ぐ戦後75年 第2部 伝承者の自覚

元海軍軍属 戰争を省みて「家族通信」に

宮川 嘉明さん(90)

江別市

昭和5年生まれ

「戦争はもう、こりどり」との
思いも込み、次世代に伝えるため
家族通信「かたつむり」を娘
や孫に送り続けて四半世紀にな
る宮川嘉明さん(国政宗撮影)

③

勤務も過酷でした。蒸気船の船底で石炭庫からボイラーマーまで石炭を運んでくる「石炭夫」です。

私は45年3月、肺を患って下船休養の身となつたため、命を永らえることができました。配属地がタクタでした。思い出したくもない。妻にも言つたことがあります。

私は同期生70人の消息は知る事ができない今まで、クラス会もできません。遠く南方や北方の大西洋に行つた仲間は満足な護衛も武器もない海上輸送で多くが命を落としてしまったのですが、と思い

ます。
丸腰同然の航海は緊張と恐怖の連続だった
勤務過酷 扱い「鳩以下」

20年11月 6日 道 新朝

家族を取り巻く出来事を3人の娘や4人の孫で語る。1994年から四半世紀続いているB4判一枚の家族通信「かたつむり」が、330号に達しています。

14歳で輸送船に

例えば2003年12月10日の第190号。

「間もなく乗船していたところ、父は私に徴兵保険をかけていた。多くの仲間は嚴寒の海で、南の海で、船と運命を共にした。幸運にも私は五体満足で故郷に戻ってきた。戦争は終わった。『保険金は



みやかわ・よしあき 石狩管内新篠津村出身。祖父が1897年(明治30年)に石川県から入植した開拓農家に、8人きょうだいの3男として生まれた。戦後は北海道芸大(現在の教育大)札幌分校を経て石狩、空知管内各地で小学校教諭を務めた。現在は夫人と2人暮らし。

戦後教員の道へ

は、軍属になるため、小樽海員養成所機関料に入りました。9月には大阪商船(現商船三井)の間宮丸に乗り、小樽を拠点に樺太や朝鮮との間で軍需物資などを運ぶ任務に従事しました。



1944年(昭和19年)春、国民学校高等科を修了した14歳の私

丸腰同然の航海は緊張と恐怖の連続でした。一刻も早く安泰な陸上に上りたい気持ちでした。戦争の「出前持ち役」をさせられた船員の待遇は最低でした。「軍馬、軍犬、軍鳩、その下に船員」と言われたほど、軍人と軍艦船員の扱いには差がありました。

実際、就航船の88%に当たる

千隻が海の藻すととなり、戦没した海員は6万人を超え、そのうち海員は未成年の海員は2万人近くないとされています。私も同じ14歳は1947年で今日の私がある

戦後、教職に就く際、父親から「兵隊をつくる教育はするな」と言されました。小学校も出す、働き始めの農夫で、戦時中は息子3人を兵役に送り出した軍國の父だった人の言葉です。だからこそ心に響き、現職の間、戦争のことを努めて子供たちに語りました。例えば親の戦争体験を知るうと、いつことで、参観日にそれぞれの体験を5分間ずつ話してもらいました。樺太や旧満州(現中国東北地方)からの引き揚げなど、さまざまな話がありました。

まだ沖縄が復帰前の69年、子供たち同士が文通でつながり、沖縄について学習したこともありました。「沖縄には、きちがいが多くて、人々はたいへんこまっています」と書いた手紙に、「一度は子供たちも「きちがい」イコール気違い」と思つて笑いました。しかしその後、読み進むと米軍機の墜落など「きちがい」は「基地の害」のことだと分かつて、沖縄の現実を大切に学びました。戦争はもう、こりどりです。

(聞き手・編集委員 石原宏治)